



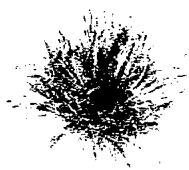
わたしの
天国で
また
会いましょうね

IR TREFFEN UNS WIEDER IN MEINEM PARADIES ● Christel und Isabell Zachert

クリステル&イザベル・ツアヘルト

訳 平野郷子

わたしの
天国で
また
会いましょうね



WIR TREFFEN UNS WIEDER IN MEINEM PARADIES ● Christel und Isabell Zachert
クリステル&イザベル・ツアヘルト
訳 平野獅子

WIR TREFFEN UNS WIEDER IN MEINEM PARADIES
by CHRISTEL & ISABELL ZACHERT

Copyright © 1993 by Gustav Lübbecke Verlag GmbH, Bergisch Gladbach
Japanese translation rights arranged with Gustav Lübbecke
Verlag GmbH through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

わたしの天国でまた会いましょうね

一九九四年八月二五日 第一刷発行

著者 クリステル&イザベル

ツアヘルト

訳者 平野 卿子

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

〒100 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

電話 編集部 (〇三) 三三三〇一六〇九四

販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

印刷所 図書印刷株式会社

©1994 Shueisha Printed in Japan

本書の一部あるいは全部を無断で複製複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。落丁・乱丁の本が万一ございましたら、本社制作部宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

わたしの天国でまた会いましょうね

装画 日置由美子
装丁 関 さゆり

この本を夫と、二人の息子クリステイアンとマテイーアスに捧げます。
テベリウス先生の友情と、フォン・レベツケ夫人のこまやかなお心づ
かいに感謝します。

クリステル・ツアヘルト

「死ぬときには、先生に手をとってほしい、っていつも思ってた。先生はいつもとっても楽しそうに笑ったわ！ あたし、先生のことティービッて呼んだの。そんなことしてよかったかな？ だけど、誰がなんとやおうと、ティービはどこかのティービさんなんかじゃない……あたしのティービなの！」

あれから十年……

わたしのイザベル！

ママはアルデンヌへやってきました。親しいお友だちの別荘です。これからあなたと心ゆくまでおしゃべりできると思うと、とっても楽しみです。ここなら思う存分あなたの思い出にひたることができますから。

十年前、あなたはわたしたちを残して天国へと旅立ってしまいました——そう、あなたの天国へ。あなたの言うとおりでした。わたしたちはあなたを失ったではありません。あなたはその自信と意志の力で、どれほどわたしたちを支え、守ってくれたことでしょう！ 最後の数週間にわたしたちのためにと書き残した日記を、意識不明のあなたの枕元で初めてみんなに読んで聞かせたときから、そのときからずっと、このあなたの遺言ともいえるものをほかの人た

ちにも伝えたいというのがわたしの切なる願いでした。そしてそれはあなたの願いでもあった、ママはそう信じています。

どうか、わたしを力づけてくれる思い出の泉を探りあてることができますように。どうか絶望的な涙の谷に迷いこみませんように。でも、多分だいじょうぶ。母親のように世話をしてくれるお友だちのおかげで、とても安らかな気持ちでいられるからです。あなたはこの人と知り合うことができなかったけれど、あなたのことを話し、いずれあなたの思い出をまとめるつもりだと打ち明けたところ、ぜひそれを実行に移すようにと、ママをこのアルデンヌの別荘へ招待してくれたのです。その上ママの身体を気づかい、涙の谷へ迷いこまないよう、気をつけていてくれます。

ママは、自分の人生でもっとも凝縮されたあの一年、あなたの人生の最後の一年——十五歳から十六歳にかけての——を、心の赴くままにたどろうと思います。思えば、天にも上るような感激と言い尽くせないほどの苦しみの一年、はかない期待に胸を躍らせ、深い深い絶望に苛まれた一年でした。しかし、あれほどの苦しみに満ちていながら、また一方ではこの上なく感動的な一年でもあったのです。わたしたちは、あなたが——生きる喜びに溢れた、ごく普通の女の子だったあなたが——たった一年のうちに、ひとりの成熟した女性へと成長する有様を見とどけることができたのですから。このことは、お医者さんも看護婦さんも、いえ、あなたの、

そしてわたしたちの運命に関わりを持ったすべての人たちを惹きつけずにはいませんでした。あなたがまるで女王さまのように死んでいったこと、愛する人たちにきつぱりと別れを告げ、別れの儀式をいわば自ら整えて死んでいったこと、これは運命があなたに与えた恩寵おんくわんでした。

さあ！ 始めましょう。わたしの人生の最後の日に、神さまが、授けた生をどのように役立てたかとお尋ねになったとき——あなたがその生と死によって贈ってくれたものをほかの人たちにも分かつことは、わたしの人生の意義のひとつなので——神さまに向かつて言い逃れをしたくはありません。

パパとわたしはローマから帰ってきました。子どもを連れずに出かけた初めての旅でした。あなたと二人の息子——クリステイアンとマティーアス——の三人は一週間も留守をまかされて大いに氣をよくしていました。わたしたちはわたしたちで、自分たちの結婚生活が、これを引きつかけに新たな段階に入ったように感じていました。そして旅の感激で心満たされて戻ってきたのです。

あれは土曜日の夜でした。わたしたちは遅くならないように帰ろうと思っていました。マティーアスの十四歳の誕生日だったからです。クリステイアンとマティーアスは、元気に迎えてくれました。けれどもあなたはもう寝てしまったというのです。珍しいことがあるものだと思います。いながらも、わたしたちはあなたの意志を尊重することにして起こさないでおきました。しばらくしてから、やはり目がさめたらしく、あなたは部屋から出てきました。青ざめ、まるで重病人のようにやつれて。みんなで心配しました。日曜日の朝、パパはすぐあなたをかかりつ

けのお医者さんへ連れていきました。診断は、こじれたインフルエンザ。ペニシリンが渡され、熱がさがったらレントゲンを撮るようにと勧められたのです。

日曜日はローマのお土産話と、あなたたちに留守中のことを根掘り葉掘り尋ねることで暮れました。そんなひどい「インフルエンザ」にかかるなんて、何かが悪かったにちがいありません。

「パーティーに行ったけど」

あなたは言いました。でもそのせいだとは思えません。

「おととい、クラブで二千メートル泳いでからサウナに入って、自転車で帰ってきたの」

ああ、あの自転車。そう、あの古いオランダの自転車は、ギアがありません。だからとても走りづらいのです。そうです、そのせいにちがいありません。(この自転車はマティーアスがいまだに大切に使っています。これで毎日大学に通っているんですよ)——けれども、そのときあなたがもらした言葉は、わたしたちをぎくりとさせるものでした。

「もしあたしがほんとに病気だしたら、すごく重いはずだし、もうかなり前からだと思わ」

月曜日と火曜日の二日間で熱はさがったものの、あなたはどんどん弱っていきました。脇腹に腫れものがありました。あざになっているわけでもなく、これも原因がわかりません。

(ただ、ひと月ほど前のクラス旅行であなたはここを打ったと言っていました)。水曜日には口をきくのもつらくなって、ベッドに座ってあえいでいました。わたしがパパの職場に電話すると、パパはすぐに帰ってきて、わたしといっしょにあなたを病院へ連れていきました。肺炎は肺炎でも、片方なのか両方なのか調べなければ――。そんな気持ちでした。けれどもその一時間後、わたしとパパは悪性腫瘍だと告げられたのです。

肺の透視のあと、そのまま入院するように言われました。生命の危機に瀕しているとのことでした。医長さんが呼ばれました。すぐ胸腔を穿刺(せんしん)(身体の一部に針を刺し、内部の液体を吸い取ること)しなければなりません。さもないと窒息してしまいます。わたしたちはあなたにつききりでした。胸から吸い出されたのは赤い液体でした。医長のペトリ先生は二つめのカニューレ(カニューレ)(身体に挿入して液の抽出や薬物の注入に用いる金属管)を入れるとすぐ、最初のを検査に回しました。それから院長のテベリウス先生に連絡を取りました。「こちらに若い女の子がいるんですが、即刻おいでになってください」

きわめて緊迫した雰囲気のうち治療が進められました。が、なんの説明もありません。落ち着かなければ。わたしは自分に言いかけました。パパも同じ思いだったことでしょう。あなたはほんとうに我慢強く立派に耐えましたね。二度か三度カニューレを入れたあとは、もう胸から液体を吸い出すことはできませんでした。ショックが起きると大変だからです。その間にベッドが用意されました。若い娘さんといっしょの部屋です。

あなたがベッドに寝かされたのを見届けてから、わたしたちは先生方を探しました。下のラボでペトリ先生を見つけ、先生のお見立てをはっきりと伺いたいと言ったところ、先生もずばりとおっしゃいました。まちがいなくこれは、悪性腫瘍の末期段階です。ただ、どういう種類の腫瘍なのかは、まだわからないとのことでした。ショックで気が遠くなりそうになりながら、パパとわたしはなんとかして平静を保とうと必死でした。一瞬のうちに、古い記憶の中の一場面が蘇ってきました。二十二年も前のことです。母とわたしたち四人のきょうだいは——あのときわたしは十九でした——母の肺に腫瘍があり、神といえども救うことはできないと告げられたのです。二週間後、母は亡くなりました。ママは即座に、あなたの、そしてわたしたち家族の運命がどれほど重大な危機にさらされているかを悟りました。けれども、わたしたちの不安をあなたに伝えてはなりません。あなたは全力で苦痛と闘わなければならないのですから。まだ、あなたに事実を伝えることはできませんでした。

ほんとうならこの日はとても楽しい一日になるはずでした。日本に行っていたおばあちゃん——パパのお母さん——が帰ってきたのです。わたしたちは空港へ迎えにいったおばあちゃんのあるものでした。おばあちゃん自身、日本人の母親とドイツ人の父親のもとに生まれ、いまでも流暢な日本語を話します。おじいちゃん(ツアヘルト先生)は、旧制松本高校でドイツ語とドイツ

文化を教えていました。いまなお日本で、日本学研究者として尊敬されており、妻であるおばあちゃんも亡くなった（ヘンセイ）に対する尊敬にあずかっています。そういうわけで、七十四歳にもなつてこんなによろしい旅行ができることに感謝しつつ、幸せな気持ちで戻つてきたのです。

わたしたちはあわててすべての約束を取り消し、新たに予定を組み直しました。けれども夜になつて――あなたは力尽きてぐったりしてしまいました――わたしたちはおばあちゃんに会いにきました。たしか、そのときにはまだ腫瘍とは言わず、とても重い病気だとだけ話したように思います。おばあちゃんはあなたへのおみやげにと、川崎の稲毛神社の金のペンダントをくれました。この神社の主、市川浩之助さんはおじいちゃんのかつての教え子です。これはお守りだということでした。

帰り道、もういちど病院に寄りました。夜勤の若いお医者さんにあなたを見舞つていくよう勧められました。わたしたちにはとてもその勇気がありませんでした。そしてしばらくの間、病室の前でなすすべもなく立ちつくしていたのです。そのお医者さんはわたしたちを慰め、お嬢さんは眠っていますと教えてくれました。家に帰り、マティーアスとクリスティアンにぎりぎり必要な事実だけを伝えました。二人ともただ呆然とするばかりでした。信じられなかったのです。これからいつたいどんな運命が自分たちを待っているのか見当もつかなかったのです。

よう。わたしは思いました。今日かぎりでこの子たちの子ども時代も青春時代も終わるのだ、と。

パパとわたしは、あなたやほかの人たちになんと告げたらいいのかあれこれ思い悩みました。涙がとめどなく流れ、そのうちにいつのまにか寝入ってしまいました。

次の日は予定がぎっしりつまっていました。あなたはあらゆる医学的技術を駆使して検査されました。わたしたち親の仕事は、これまでのあなたの病歴に関するすべての書類、レントゲン写真、カルテなどを集めることでした。それは膨大な量にのぼりました。そのうち一番新しいものは、まだ四週間しかたっていません。これは脇腹のレントゲン写真と大きな血球の顕微鏡写真で、このきつかけとなったのは、前にも触れた、オランダの運河をボートで行くクラス旅行でした。このときに右の脇腹を強く打ったと聞いて、かかりつけのお医者さんに行かせたのです。幸い骨折ではなく、検査の結果も問題ありませんでした。

それからあなたの踝くるぶしの手術のカルテもかなりの量にのぼりました。夏、あなたは壊死くわいじにかかり、とても痛がったので、大病院からも、デーデリヒ教授からも手術を勧められました。運よくこのときの組織検査の結果はマイナス、つまり異常なしでした。それでもやはり、あなたはずでにこの手術を自分にとってひとつの宿命だと受けとめたのですね。なぜなら、あなたにとって欠かせない人生の楽しみであるスポーツが制限されてしまったからです。一番シヨック

だったのは、もうテニスができないことでした——人一倍テニスが好きだったのに！ ママは今でもあなたの優勝カップを戸棚にかざっていますよ。ジョギングも禁止されました。これを受け入れるのは、とてもつらいことでした。手術後、ギプスが取れてから、あなたはすこしずつ水泳を始め、自転車にも乗りはじめました。けれども、当時あなたはまだそれを自分にとって大きな幸せだとは感じていませんでした。そのあと、わたしたちは、それまで考えたこともないほどつつましい幸せで満足することを学ばなければならなかったのです！

わたしたちは小児科のカルテまでそろえました。二歳のとき、あなたは頭を打って死にかけたのです。非常に重い脳震盪しんどうになり、治るまでに三か月もかかりました。あのときは、だいたいな娘を神さまにもういちど授けていただいたような気がしたものでした。

こうしてすべての書類をそろえました。あまり役に立たなかったように思います。

午後、検査の結果、腫瘍がすでに全身に拡がっていることがわかりました。とはいえ、わたしたちにはまだ知らされていませんでした。夕方、テベリウス先生が外科医長の先生といっしょに病室にみえました。ママは先生たちの様子をじっと見ていました。お二人はあなたをベッドの上に座らせ、後ろから脇腹を診察しました。お二人とも無言のまま、ただ目顔で合図していました。けれども診察を終えるとき、外科の先生がほとんど愛撫すると言っているほどやさしくあなたの背中をさすりながら、声をださずに唇で『フォル（いっばいに）』のスペルをつづり